

夕(土)まご！ 僕たちは 昨日は高校時代の同窓会(喜び)でした。  
松江城へ温泉旅館船に乗って、昔の仲間と湯浴みながら楽しい

## 今週の倫理

一時を忘れし、生きて山ばらがす。

2024.4.6~4.12

4月のテーマ | 肯定的思考

1380号

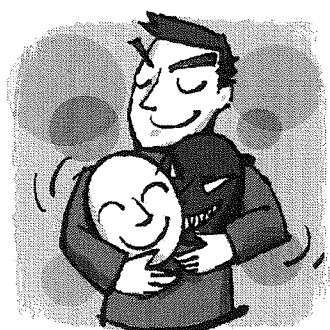
毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、  
倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋(一九  
二一—一九九九)の言葉を掲載いたします。

悪は一般に肯定できないものとしてあつかわれている。悪者は社会から排撃され、制裁をうける。法を犯す者はそれ相応の罰をうけるのである。法にはふれないけれども、明らかに悪をおこなつて人を苦しめるとか、知能犯といったような巧みな行動によつて人を不幸に落としいれるとかする者にたいしては、嫌悪や憎悪を抱き、そうした行為を排除しようとする。これらは悪の否定というべきであろう。

しかしながら、このよだな見方を超えて、いかなる悪をも肯定する立場がある。それはすべての現象を肯定するもので絶対肯定、あるいは大肯定の立場といえる。

地球が誕生して今日までに四十五億年とか四十八億年が経過したといわれるが、それには物理的理由があつて、熱球であつても、氷に覆われていても、原因があつてそのようになつたのである。寒波の襲来が不完全で、熱風の拡大が完全であるとか、平靜が善で、動乱が悪であるとか、そうした区別は人間の主觀が勝手にきめるだけのことに過ぎず、すべてはそうなるようになつて、そうなつているのであるから、それをそのまま肯定する。

善とか悪とか、一般でいうようなものを超えて、まずすべてを肯定し、受容する。これを大肯定というのである。



## 大肯定の姿勢

丸山竹秋

この立場に立てば、自然界のことにかぎらず、人間界のことともすべて肯定する。肯定するとは、それを「よし」と受けることである。この「よし」は道徳的価値判断でも、経済的価値判断でもない。存在し、生起するすべての現象にたいしてあるがままに見る、聞く、感じることである。したがつて悪いことをしている人も、それをそのままに見る。善いことをしている人も、それをそのままに見る。これは他人に対することだけではなく、自分自身のことについても同様である。病気、事故、その他苦難などにたいしても、それをそのままに見る、受け取る。在るべくして在り、成るべくして成つて自分の状態にたいして、それらをすべて肯定するのである。すべてを受け入れる大肯定の心境は至人の心であり、至境である。最高最上の心境ということができる。この大肯定は、すべての人が、同時に、一度になれるとは限らないが、かならずしも難行苦行を経なければならないといふわけのものでもなく、そのように思えばそれでよいし、そうなれるのである。すべてを受け入れる大肯定がもつとも純粹であり絶対境であることを示す。誰でもそういうれる可能性はあり、それにいわゆる難行苦行をするものとは限らないけれども、安易に、いい加減になれるものではない。ましてやこの大肯定を常時なし続けてゆくことはなかなかむつかしいのが普通であろう。

(『こうすれば人類は救われる』より)